

## 「ドライブ・マイ・カー」マイサーブ

株式会社伊藤公治商店  
伊藤玄二

アカデミー賞候補に上がって話題の「ドライブ・マイ・カー」を見て来ました。

友人からの「あれお前が乗ってた車じゃない？」のメールにも背中を押されました。公開は昨年八月でだいぶ時間がたっていますが客席は八分の入り。原作が収録された文庫本「女のいない男たち」も最近増刷、本屋で平積みになっています。今更ながらアカデミー賞の影響力を感じさせられます。

上映時間は三時間で退屈ではないがやや冗長、疲れました。村上春樹の小説は会話、出来事を羅列して、内面描写は少なく、「あとは読者がそれぞれ自分で考えて」のように思えて私にはまだるっこい。良い読者とはとても言えません。

濱口監督の脚本はダイバーシティを強調したものになっています。物語の最後に、準主役の雇われ女性ドライバーが在日であること、韓国語に堪能なことが突然示唆されます。それまでに何人も登場した韓国人、韓国語の会話に無表情を通した彼女がどのような理解、感情を持ったのか映画が終わってから考えさせられました。

そんな所がいかに村上春樹風で、監督の原作者に対するリスペクトが感じられます。

村上春樹ファンには最高の一本になるかも知れません。劇中劇に使われているチェーホフ「ワーニャ伯父さん」をご存じのかたはより楽しめると思います。



もうひとつのお目当て、車はサーブ900ターボ。小説では黄色のコンバーティブルでしたが映画は赤のハッチバックになっていました。年式は少し新しいようですが正に私の乗っていたのと同じ型でした。



マイサーブ

短期間で生産を止めたのにあれほど状態のいい車が良く残っていたものです。おそらく個人所有の車を借りて来たのでしょう。主人公がこの車を好きで大事に思っているのには共感できました。一言で言うと味がある車です。

しかし「15年乗っていて故障したことがない。」のセリフには思わず「ほんとに？」と言いたくなりました。私の車は10年目くらいから細かな故障が多く、電気で動くものは止まり、水、オイル、雨と漏るものは漏るようになりました。メーカーが消滅して部品もなくなり30年乗って廃車にしました。家族は今でもあの車が一番良かったと言っています。

映画では女性ドライバーの運転で疾走するシーンが多く、独特のエンジン音を懐かしく聞きました。